

筑波大学名誉教授

建築家、工学博士、里山建築研究所主宰。一般社団法人日本茅葺き文化協会代表理事、一般社団法人日本板倉建築協会代表理事を務める。日本および東アジアの伝統的住宅の研究、特に茅葺き民家や小屋と倉に関する研究を行い、茅葺き民家の活用の技術とデザイン、茅場の調査と再生にも取り組んでいる。著書に『日本茅葺き紀行』『茅葺きの民俗学』『小屋と倉』『民家造』『住まいの伝統技術』他がある。



安藤 邦廣

静岡県東伊豆町長、全国草原の里市町村連絡協議会会長

1968年生まれ。名古屋大学大学院工学研究科を修了し、民間建設会社勤務後、参議院議員秘書、富士常葉大学非常勤講師などを経て、2010年に参議院議員選挙で初当選。第二次安倍改造内閣において、経済産業大臣政務官・内閣府大臣政務官（地方創生）・復興大臣政務官に就任した。2016年には参議院選挙で再選し、参議院・農林水産委員会委員長、国土交通副大臣・内閣府副大臣、復興副大臣を歴任。2022年3月から現職。



岩井 茂樹

ジャーナリスト、自然環境研究センター理事

東洋経済オンラインや地方自治専門誌「月刊ガバナンス」などに書いている自営のジャーナリスト。1979～2018年、読売新聞の記者。留学や特派員で米国にいた時期は合わせて9年間。もともと社会部の記者で、最近は防災減災や地域の生態系保全、地域づくりなどの取材が多い。私たちは、経済成長ありきの「昭和の時代」の考え方からいまだに抜け出せず、開発や土地利用を続けている。なんとかしたい。



河野 博子

一般社団法人 全国草原再生ネットワーク代表理事

専門は草地生態学。1979年に農林水産省に入省以来、自然環境、地域社会など幅広い分野に関心をもち、草原にまつわる問題を農畜産業や文化景観の視点から幅広く調査研究している。全国草原サミットの開催にも尽力し、2007年には「全国草原再生ネットワーク」を立ち上げた。また、自然推進法に基づいて2005年に発足した「阿蘇草原再生協議会」会長として、人と牛が共生する阿蘇草原の維持・再生に取組んでいる。



高橋 佳孝

タレント・日本環境教育フォーラム理事

緑豊かな福島県伊達市で生まれ育つ。幼い頃から家の前の山で遊ぶのが大好きで、多くの学びと癒しを自然から得ていた。大学生の頃には三重県美杉町の倶利伽藍山のふもとにて農業を経験。近くには曽爾高原もあり、朝日や夕日とともに、緑を駆け抜ける風の気持ちよさを全身で感じていた。現在はレポーターとして、自然とのつながりを感じる瞬間を多くの人と共有すべく、旅番組や情報番組、イベントなどに出演している。



長沢 裕

東京農業大学地域創成科学科教授

造園学博士。専門は風景計画、観光、環境教育。2001年から阿蘇の草原景観保全研究に取り組み、草原と共生する暮らしをテーマに草原学習を阿蘇の各地小中学校で実践している。2012年の九州北部豪雨、2016年の熊本地震では、地域復興を目指し草原学習と防災教育を統合した環境教育プログラムに取り組んだ。未来の担い手の子どものために、小学校、保護者、NPO、行政と連携した草原学習の教育活動方策について研究している。



町田 怜子

選考委員長 | 京都大学名誉教授

専門は生態学。とくに植物の送粉や種子散布をおこなう動物との関係について研究に取り組む。そのうち、草原に多く生息する送粉者のマルハナバチ類について、九州や本州の各草原をはじめ、モンゴルまで調査を実施。また、日本列島の半自然草原や里山を含むさまざまな自然の成り立ちについて共同研究を行い、その成果を「シリーズ日本列島の三万五千年―人と自然の環境史（全6巻）」で発表している。



湯本 貴和

東京大学名誉教授

解剖学者。東京大学名誉教授。心の問題や社会現象を、脳科学や解剖学などの知識を交えながら解説し、多くの読者を得た。1989年『からだの見方』でサントリー学芸賞受賞。新潮新書『バカの壁』は大ヒットし2003年のベストセラー第1位、また新語・流行語大賞、毎日出版文化賞特別賞を受賞した。大の虫好きとして知られ、昆虫採集・標本作成を続けている。『唯脳論』『身体の文学史』『手入れという思想』など著書多数。



養老 孟司

選考委員プロフィール

スケジュール	
応募受付期間	10月18日(火)～ 2023年1月10日(火)15時必着
↓	
審査期間	
書類選考	2023年1月11日(水)～
最終審査	選考委員会による審査 2023年3月
↓	
結果通知	2023年4月
↓	
表彰式の準備	・現地取材 ・追加書類の提出等
↓	
表彰式・シンポジウム	2023年秋予定

応募方法

ホームページをご確認ください。
<http://sato.sogen-net.jp/>



委員長からのメッセージ

湯本 貴和

京都大学名誉教授



明治大正期には日本国土の13%程度を占めていた草原が、茅葺きやまぐさ秣の需要が激減したことなどから、現在では10分の1以下に減少しました。

草原が失われることは、草原にしか生きられない植物や昆虫が絶滅の危機に瀕するだけでなく、草原に関する地域の歴史や文化、人々の記憶や知恵、絆までが失われてしまうことを意味します。

「未来に残したい草原の里100選」は、それぞれの地域が草原を生かした地域づくりを競い合い、その輝かしい成果を顕彰する場とは考えていません。

共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイデアを学び合い、共に未来へ進んでいくための仲間探しの場でありたいと思います。
みなさんが応募する段階で、誇るべき宝を再発見したり、足りないパーツを認識したりする作業そのものに大きな意味があると信じています。
第2回の募集になります。迷っているみなさん方も奮って「未来に残したい草原の里100選」にご応募いただき、わたしたちの仲間の輪に加わってくださいことを願っています。

全国草原の里市町村連絡協議会 事務局

〒413-0411 静岡県賀茂郡東伊豆町稲取3354

東伊豆町 企画調整課

E-mail:sogen100@sogen-net.jp / TEL:0557-95-6202



未来に残したい
草原の里
100選

応募期間

第二期募集

2022年10月18日(火)～
2023年1月10日(火)15時必着

背景・目的

日本の暮らしは草原によって支えられてきたが、高度経済成長期以降、草原は国土の1%まで激減

これからの持続可能な社会の実現のためには、草原のある里で育まれてきた技術や知恵が欠かせない

人と自然との長年にわたるやりとりにより、
● 知識・意識・技術が蓄積されていることが
草原の里が持つ価値

この価値を「共創資産」と捉え、
● 日本各地の草原の里に残る「共創資産」を
日本全体で共有・活用して、
次世代に希望ある自然共生型の社会を作る

全国24自治体の首長が組織する「全国草原の里市町村連絡協議会」は環境省に「全国草原の里100選」の検討を進めていくことについて要望書を提出し、連絡協議会として選定事業を推進しています。

草原の里に認定されると、
● プレスリリース・Web・冊子・事例報告会などで
地域の価値を全国にお伝えします



今春、美しい草原の風景を残す地域34箇所が初の100選として選ばれました。
あなたの地域の草原、そこで育まれてきた暮らし、文化を見つめ直し、全国にアピールしませんか。

選定対象となる「草原の里」

応募時点で実際に草原が存在している地域に限ります。

応募対象者

日本国内に拠点を置き、草原と関わっている民間団体または地方自治体が応募いただけます。
民間団体が応募する場合には、地方公共団体の推薦を得た上でご応募ください。

主な審査基準

各地に残る「共創資産」を日本全体で共有し、活用していくことで、次世代に希望のある自然共生型の社会をつくるために、以下に例として示したような観点から、段階的な審査を行います。審査は有識者で構成する草原の里選考委員会が行います。

1. 草原の自然
2. 草原からのめぐみ
3. 草原を維持するしくみや、価値を享受するしくみの良さ
4. 共生型社会の実現に向けた波及効果（ロールモデルとしての期待）
5. 草原に対する思いの強さ

主催

全国草原の里市町村連絡協議会

後援

環境省 農林水産省

協力

公益財団法人 日本自然保護協会
一般社団法人 日本茅葺き文化協会
一般社団法人 全国草原再生ネットワーク



筑波大学名誉教授
安藤 邦廣

草原は草の実と草の繊維の生産地。森から出た人類はそれを活用することで衣食住を営み、進化を遂げてきました。草を刈り、使うことで草原は再生され、生活が持続されます。草を使うことをやめれば、草原は放置され消えていきます。草の利用の最大は茅葺きです。茅葺きがなくなって草原は消えました。茅葺きが復活すれば草原も甦ります。その循環の輪を続けましょう。衣食住に草原を生かすことは、昔も今も未来も変わらぬ持続的な暮らしの基盤です。



静岡県東伊豆町長/
全国草原の里市町村連絡協議会会長
岩井 茂樹

私たち協議会は、草原保全活動の現状と課題について、より一層議論を深め、活動の連携と交流を図り、広く国民に草原の魅力と公益的役割を発信し、草原の利用、保全を核とした地域づくりと地域の活性化を図ることを目的にしております。また、草原の価値を「共創資産」と捉え、次世代に希望ある自然共生型社会の実現に向け「草原の里100選」を推進しています。この事業をきっかけに、全国の草原の里を活気づけることができればと期待しております。



ジャーナリスト/
自然環境研究センター理事
河野 博子

原っぱは東京にもありました。9月の十五夜の前、スキを刈りに行った記憶があります。採ってきたツクシが佃煮になって食卓に並んだり、土手で摘んだヨモギから祖母がヨモギ餅を作ってくれたりしたことも思い出されます。かつては江戸川区葛西沖の「水没民地」に生えるアシ、ヨシは重宝されたと聞きました。草地消滅はいまや全国的なトレンド。身の周りにある草や生きものを大切に使う動きを広げてその傾向を止め、暮らしを豊かにしませんか。



一般社団法人
全国草原再生ネットワーク代表理事
高橋 佳孝

日本の草原の起源は、古くは縄文時代頃にまでさかのぼると言われます。古来より人々が自然に手を入れ、世話をすることで作られてきた、人と自然の共生の産物なのです。そこには、新しい時代の持続可能な社会の礎になり得る「智慧」と「技術」と「文化」が根付いています。この草原の価値を受け継いで、地元で頑張っている、頑張ろうとしている人たちを応援し、勇気づける。そんな「草原の里100選」でありたいと願っています。



未来に残したい
**草原の里
100選**

選考委員からのメッセージ



タレント/
日本環境教育フォーラム理事
長沢 裕

新鮮な風をうけ、深く呼吸していると、まるでその風が心の中にまで吹き込んできて、心のもやもやを溶かしていくように感じます。草原は私にとって最高の風を感じることが出来る場所であり、疲れた心を優しく包んでくれる癒しスポットです。これから多くの人がある草原のある風景に癒され、そしてそこで育まれてきた地域固有の文化や豊かな生態系がまた次世代へとつながっていくように、私もご参加される皆様と一緒に「草原の里100選」を共に盛り上げ、大切にしていければと思います。



東京農業大学地域創成科学科教授
町田 怜子

草原の里100選を通じて、草原に関わったことがなかった人が草原の「ファン」になり、そこから草原保全の「サポータ」が誕生し、子どもたちが草原で思いっきり学び「未来の担い手」となってくれることを願っています。そして、草原の里100選のご応募を通じて、地形条件や社会条件など立場が異なる地域が集まって、草原保全の悩みを共有し、課題解決に向けて知恵を出し合うことで、地域が持つ魅力を活かした「草原自慢」が各地で広がることを期待しています。



選考委員長/
京都大学名誉教授
湯本 貴和

草原が失われることは、草原性の動植物が絶滅の危機に瀕するだけでなく、草原に関する地域の歴史や文化、人々の記憶や知恵、絆までが失われてしまうことを意味します。「草原の里100選」は、それぞれの地域が草原を生かした地域づくりを競い合い、その輝かしい成果を顕彰する場ではなく、むしろ共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイデアを学び合い、共に未来へ進んでいくための仲間探しの場でありたいと思います。



東京大学名誉教授
養老 孟司

現代人は計算機と同じで、ゼロか一しか許しません。残りはノイズといわれます。自然環境も似たようなもので、住宅地が森かということになって、草原的な環境はどんどんなくなってしまいます。そんな曖昧なもの、いらないよ、どっかかにしてくれ、というわけです。たまにあっても、薬で除草する、草刈り機で刈る。これを「気持ちがいい」と言う人たちです。